

# 矢田大出口遺跡2次

—浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

2007.7

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

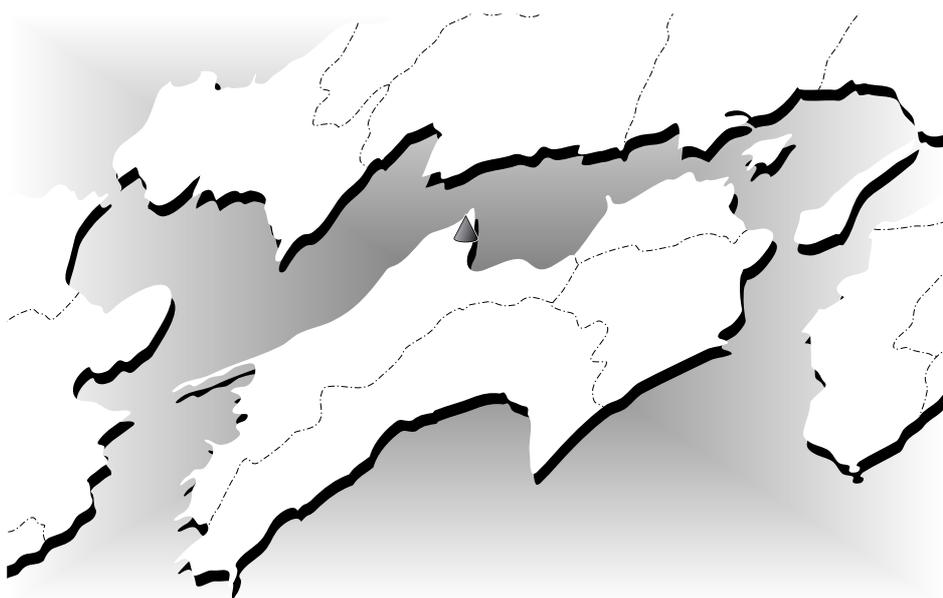






# 矢田大出口遺跡2次

—浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—



2007.7

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター



## 序 文

このたび、浅川河川改修工事に先立ち、愛媛県の委託を受けて財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが、平成19年3月から同年5月にかけて愛媛県今治市矢田の同予定地で実施した、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書を刊行することとなりました。

今回の調査では、浅川の旧河道と縄文時代から中世にかけての遺物を検出いたしました。中でも、今回確認できた浅川旧河道の存在は、当時の地理的環境を考えるよい資料になるものと思われます。

今後、本報告書が地域の歴史や考古学研究の資料として、活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に対しましてご理解とご協力をいただきました愛媛県をはじめ、ご指導をいただいた関係機関の皆様ならびに地元の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年7月

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

理事長 野本 俊二



## 例 言

- 1 本報告書は、愛媛県今治市矢田に所在する矢田大出口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書の作成は、浅川河川改修工事に伴い、愛媛県の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成19年3月から平成19年5月の間に実施し、整理作業および報告書の作成は平成19年6月から平成19年7月にかけて実施した。
- 4 発掘調査および整理・報告書の作成は、次の職員が担当した。  
池尻伸吾 福山裕章
- 5 発掘調査および報告書作成において、下記の職員および作業員の協力を得た。

### 職 員

兵頭 勲

### 現場作業員

井出順子 宇高利雪 大澤敏郎 越智繁敏 四方志保 芝田邦夫 瀬野宏幸  
矢野里子

- 6 本報告書の執筆・編集は池尻が行った。

# 凡 例

## 一覧表の略記号表記例

### 遺構の略号

遺構種別	略号
流路・旧河道	SR...

### ピット一覧の土質分類

土質	略記号
砂混じり粘土	A
シルト混じり砂	B
粘土混じり砂	C
細砂混じりシルト	D
砂混じりシルト	E
シルト	F

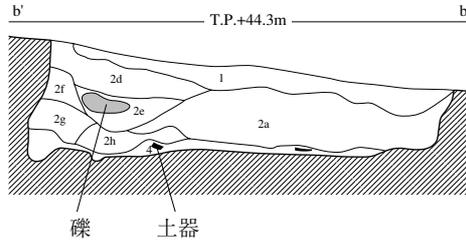
### 遺物一覧の略記号

略記号	内容
L	長さ
W	幅
H	器高・高さ
T	厚
R	直径
MR	最大径
HR	口径
TR	口頸部径
NR	底部径
LR	重量
g	外面
o	内面
i	推定値
(cm)	値
[g]	値

### 須恵器焼成の略記号

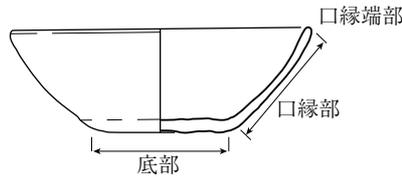
焼成	略号
良好堅緻	A
↑	B
↓	C
生焼け	D
↓	E

## 遺構の表現例

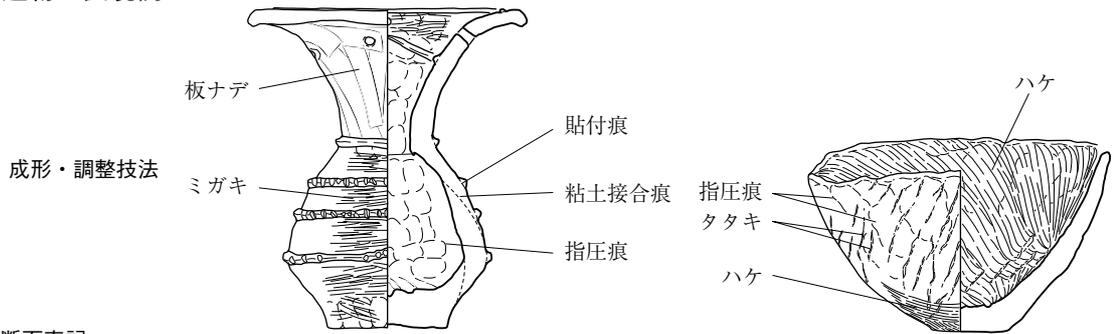


土層断面図中の網伏せは礫、塗りつぶしは土器を示す。

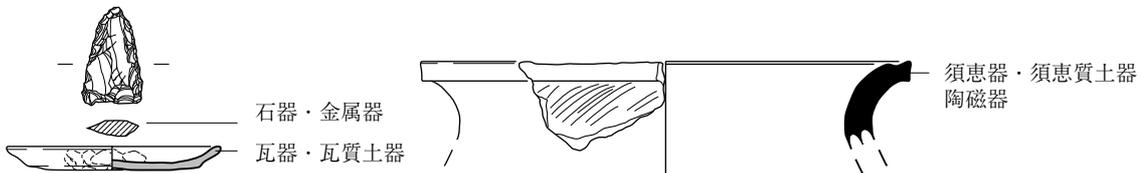
## 杯の部位名称



## 遺物の表現例



## 断面表記



本報告書では煩雑さを避けるため、壺形土器・甕形土器等の「形土器」は省略した。

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(池尻)	1
第1節 調査に至る経緯と経過	(池尻)	1
1 確認調査	(池尻)	1
2 調査の経過	(池尻)	1
3 調査の体制	(池尻)	1
第2章 遺跡の立地と環境	(池尻)	3
第1節 地理的環境	(池尻)	3
第2節 歴史的環境	(池尻)	3
1 縄文時代以前	(池尻)	3
2 弥生時代	(池尻)	3
3 古墳時代	(池尻)	5
4 古代以降	(池尻)	5
第3章 調査の概要	(池尻)	7
第1節 地形と調査区	(池尻)	7
第2節 基本層序	(池尻)	7
第3節 遺構と遺物の概要	(池尻)	8
第4章 縄文時代～中世の遺構と遺物	(池尻)	11
第1節 自然流路	(池尻)	11
1 SR01	(池尻)	11
2 SR02	(池尻)	11
3 SR03	(池尻)	14
4 SR04	(池尻)	15
第2節 遺物	(池尻)	15
1 縄文土器	(池尻)	15
2 瓦器	(池尻)	15
第5章 まとめ	(池尻)	19

## 図 目 次

図1	調査区の位置 .....	2
図2	周辺の遺跡分布 .....	4
図3	検出遺構と基本層序 .....	9
図4	SR01遺構と遺物.....	12
図5	SR02・03・04平断面.....	13
図6	SR02・04遺物.....	14
図7	遺構に伴わない遺物 .....	15
図8	浅川旧河道と周辺の遺跡立地 .....	20

## 表 目 次

表1	調査体制 .....	1
表2	主要遺構一覧 .....	7
表3	掲載遺物一覧 .....	16
表4	出土遺物一覧 .....	17

## 図 版 目 次

図版1	上:遺跡遠景(大谷墓地より)／下:調査前(南より)
図版2	遺構完掘状況(南より)
図版3	上:西壁基本層序(東より)／下左:SR01(西より)／下右:SR01セクション(北西より)
図版4	上左:SR02(北東より)／上右:SR02セクション(南より) 中左:SR03(西より)／中右:SR03セクション(東より) 下左:SR04(南西より)／下右:SR04セクション(東より)
図版5	出土遺物1(1～14)

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### 1 確認調査

愛媛県は浅川水系広域基幹河川整備事業に先立ち、工事予定地が周知の埋蔵文化財である「矢田西之窪遺跡」等に近接しているため、愛媛県教育委員会(以下「県教委」とその取扱いについて協議を行った。協議の結果、予定地内の埋蔵文化財の有無について県教委が確認調査を実施することとなり、平成18年9月から10月にかけて踏査および試掘調査を実施した。その結果、工事予定地内において古墳時代～中世の遺跡の存在が確認された。

### 2 調査の経過

試掘調査によって、工事に先立つ記録保存のための発掘調査が必要となったことから、愛媛県と県教委および財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下「県埋文センター」)が協議を行い、平成19年3月に愛媛県今治地方局(以下「地方局」)の委託を受けて県埋文センターが発掘調査を実施することになった。なお、調査区の南西約300mの地点には、県埋文センターが平成8～9年にかけて発掘調査を実施し、平成12年に報告書を刊行した「矢田大出口遺跡」が存在することから、今回設定した調査区は「矢田大出口遺跡2次」とした。

発掘調査は、平成19年3月から調査準備を行い同年4月10日に着手した。発掘調査は県教委の試掘結果を参考に、まず調査区の周囲に人力でトレンチを掘削して土層の堆積状況を確認した。その後、機械力を用いて遺構面の直上まで表土層を除去し、遺構・遺物の検出および掘削を行った。それらの作業と並行して平・断面図の測量および写真撮影などの観察・記録を実施し、これらの作業を基盤面まで繰り返した。

なお、測量については、基準点(WGS84系測地成果2000)を調査区周辺に打設してこれを用いた。また、遺物の取り上げについては、層位・遺構ごとに取り上げ、必要に応じて出土状況図やドットマップなどを作成し、現地における発掘調査は5月22日に完了した。

発掘調査で得られた資料については、遺構・遺物の図画や写真類を埋文センターが管理している。

### 3 調査の体制(表1)

発掘調査および報告書作成の調査体制は表1のとおりである。

表1 調査体制

平成19年度	
理事長	野本俊二
常務理事	日野孝雄
総務課長	竹田真二
調査課長	岡田敏彦
調査第二係長	眞鍋昭文
調査員	池尻伸吾
派遣調査員	福山裕章



図1 調査区の位置

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

矢田大出口遺跡が所在する今治平野は高縄半島北東部に形成された沖積平野である。市町村合併以前の旧今治市は今治平野をその市域としていたが、現在の今治市は隣接していた波方町・大西町・玉川町・朝倉村および菊間町と芸予諸島の吉海町・宮窪町・伯方町・関前村の10市町村が合併し、県下最大級の市域を有している。陸地部と島嶼部は来島海峡で隔てられている。来島海峡は古来より海上交通の要衝であるとともに難所として知られ、現在でも国際航路として船舶の往来が頻繁で、同時に、海難事故が多発する海域としても知られている。

市の中心をなす今治平野は地質学的には領家花崗岩帯に属し、海浜に接する幅1～2kmの範囲は海岸砂堆列を含む三角州性の低地で、内陸部は浅川・蒼社川・頓田川などの主要河川によって形成された扇状地および扇状地性の氾濫源である。土壌は花崗岩を母材とする風化土(バイラン土)であり、水持ちが悪く、低地部では地下水位が極めて高い。平野の周辺には高縄山系やその分離丘陵である近見山系の山地帯が広がり、その周辺には、山裾を取り巻くように起伏の小さな丘陵地帯が分布する。矢田大出口遺跡は、こうした丘陵地帯の一つである日高丘陵北部に形成された開析谷のほぼ中央部付近に立地する。

### 第2節 歴史的環境(図2)

#### 1 縄文時代以前

旧石器時代の遺跡は芸予諸島地域において散見される。いずれも内水面を臨む高台に立地したキャンプサイトと考えられ、代表的な例として伯方島の金ヶ崎遺跡があげられる。国府型ナイフ形石器のほか船野型細石核などが確認されている。平野部では、近年調査がおこなわれた高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡の2次調査においてサヌカイト製の角錐状石器が出土している。

縄文時代遺跡の調査としては早期押型文土器が出土した叶浦B遺跡が最古例としてあげられるが、表採資料では熊口遺跡や小漕遺跡で草創期の有舌尖頭器が確認されている。遺跡経営が本格化するのは縄文海進後の後期以降である。この時期には江口貝塚をはじめ、糸大谷遺跡や火内遺跡・馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡など臨海部の遺跡が顕著である。平野部では中寺洲尾遺跡などがあげられる。糸大谷遺跡や馬島亀ヶ浦遺跡など来島海峡に面した臨海集落からはサヌカイト原石や盤状剥片が見られ、漁撈採集を生業とするとともに、物資の遠距離移動の中継基地としての役割を担っていたものと考えられている。

#### 2 弥生時代

前期には臨海部の糸大谷遺跡や馬島亀ヶ浦遺跡、平野部の阿方遺跡や中寺洲尾遺跡などで遠賀川系土器が確認されている。



図2 周辺の遺跡分布

前期末から中期初頭の遺跡は、今治平野北部の低丘陵沿いで多く確認されている。代表的な遺跡として「阿方式」の指標で知られる阿方遺跡(阿方貝塚)や片山貝塚があげられる。

中期前半は、丘陵先端部に位置する山路下平Ⅲ遺跡や、扇状地の扇中央に位置し「中寺式」で知られる中寺遺跡が挙げられる。凹線文土器が盛行する中期後半には、阿方頭王遺跡群のように低丘陵に遺跡が面的に展開する状況がみられる。

後期になると高橋湯ノ窪遺跡・中寺馬之丞遺跡・新谷畦田遺跡など遺跡数も増加し、丘陵裾部や平野部など広範な範囲に遺跡が展開する。終末期にかけては、松木広田遺跡などにみられる「松木遺跡群」を母体として、頓田川左岸の独立丘陵上に唐子台墳墓群をはじめとする墳墓が出現し、県内における古墳出現期の様相を考えるうえで貴重な資料となっている。

### 3 古墳時代

古墳時代前期の墓制としては、弥生時代後期より連綿と造墓活動を営んできた唐古台古墳群が挙げられる。特に三角縁神獣鏡の出土で知られる前方後円墳の国分古墳、前方後方墳の可能性のある雉之尾1号墳などは注目される。また、燧灘を見下ろす丘陵上に築造された県下最大の前方後円墳である相の谷1号墳(全長82m)は、その立地から海上交通に影響をもつ首長の存在が推察される。別名一本松古墳は、地域首長の在地化した墳墓として注目される。

中期古墳は前期に比べるとその数は減少するが、二の谷2号墳や長沢1号墳、頓田川中流域付近には細線式獣帯鏡や各種埴輪(円筒・形象)が出土した樹之本古墳、四神四獣鏡が出土した根上り松古墳が築造される。

後期に入ると今治平野を囲む丘陵上に横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が展開する。なかでも頓田川中流域は県内有数の古墳密集地で、五間塚古墳・七間塚古墳などを有する野々瀬古墳群や多伎宮古墳群などが代表的である。

集落については、近年調査された高橋湯ノ窪遺跡・高橋山崎遺跡・高橋徳蔵寺遺跡などで、古墳時代中期後葉から後期にかけての竪穴住居やそれに伴う多くの遺物が出土しており注目される。また、海浜部に位置する糸大谷遺跡では、終末期の竪穴住居が確認されており、小単位での生活の様子を復元するうえで良好な資料である。

### 4 古代以降

古代の今治平野周辺は越智郡・野間郡と呼ばれ、平野内には伊予国の国府が置かれ、伊予国の中心地として栄えた。国府の所在地については諸説あるが、未だ確定するには至っていない。八町1号遺跡や四村日本遺跡では、緑釉陶器・灰釉陶器・貿易陶磁器・瓦などが出土しており、官衙および官衙関連施設である可能性が指摘できる。また、別名地区の小開析谷では、別名端谷Ⅰ遺跡で銅印や鍛冶遺構などが確認されており、官的な施設である可能性が高い。また、基壇や礎石が残存し、軒丸瓦が出土した伊予国分寺跡や国分尼寺跡も、国府との関連性を考えるうえでは不可欠である。

平野周辺部の阿方春岡遺跡や石井国友遺跡は、緑釉陶器や灰釉陶器などの豊富な出土遺物・建

物の規模などから、同様に官衙との結びつきが考えられる。糸大谷遺跡では、製塩開発を目的とした地域独自の集落経営が展開され、畿内からの搬入品も多く出土している。

中世では、片山内福間遺跡や登畑遺跡・馬越遺跡などが確認されている。特に馬越遺跡では、掘立柱建物をはじめとして井戸・区画溝・畝状遺構などがみられ、当時の「ムラ」を復元できる良好な資料である。

#### 参考文献

- 愛媛県教育委員会 1992 『愛媛県内古墳-分布調査報告書-』
- 愛媛県教育委員会 2000 『愛媛県埋蔵文化財包蔵地分布図・包蔵地一覧表』
- 愛媛県史編さん委員会 1986 『愛媛県史 資料編・考古』
- 大滝雅嗣 1989 『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書II』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦ほか 1984 『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 小黒裕二ほか 2000 『阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓  
矢田平山古墳・矢田平山遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 小野倫良 2001 『馬越遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
- 小野倫良 2004 『高橋山崎遺跡-第1～8調査区-』今治市教育委員会
- 小野倫良 2005 『高橋徳蔵寺遺跡I-第1～4調査区-』今治市教育委員会
- 櫛部大作ほか 1999 『石井国友遺跡』今治市教育委員会
- 白石聡ほか 1997 『新谷畦田遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
- 白石聡 2002 『松木広田遺跡』今治市教育委員会
- 白石聡 2002 『高橋湯ノ窪遺跡-第3次調査-』今治市教育委員会
- 谷若倫郎ほか 1996 『糸大谷遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎 1998 『四村日本遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 谷若倫郎ほか 1999 『馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 中野良一ほか 1995 『八町1号遺跡-2次調査区-』今治市教育委員会
- 西川真美 2006 『高橋佐夜ノ谷II遺跡2次』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 廣田秀久ほか 1996 『中寺馬之丞遺跡発掘調査報告書』今治市教育委員会
- 藤村啓修 2001 『伊予国分寺跡確認調査』今治市教育委員会
- 真鍋昭文ほか 2000 『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

## 第3章 調査の概要

### 第1節 地形と調査区(図3)

調査区の絶対位置は、北緯34° 3'19"、東経132° 58'5"の交差する付近で、行政上は今治市矢田である。矢田大出口遺跡は浅川によって形成された開析谷のほぼ中央部付近に位置しており、調査区の東側には現在の浅川が南西から北東方向へ流下する。現地表面の標高は中央部付近で14m前後で、調査区は南西から北東方向へわずかに傾斜する。調査前は水田として利用されていた。

調査区は南北長約30m、東西幅約5m、調査対象面積は約100m<sup>2</sup>である。

### 第2節 基本層序(図3)

基本層序は5層に大別できる。

I層は水田耕作に由来する土壌で、4層に細分できる(Ia～Id層)。Ia・Ic層は近年の水田耕作土である。Ia層は暗灰黄色を呈する細礫混じりシルト層で、Ib層はIa層下位に形成された酸化鉄集積層である。Ic層はオリーブ黒色を呈する細礫混じりシルト層で、わずかにグライ化する。酸化鉄集積層の発達認められない。

II層は灰黄色から明黄褐色を呈する礫(粘土)混じり粗砂で、III層を覆う洪水砂である。2層に細分できる(IIa・IIb層)。無遺物層である。

III層は中世以降の水田耕作土である。酸化鉄集積層の形成はみられない。瓦器椀や備前焼播鉢など、13世紀後半以降の遺物を少量含む。

IV層は細礫を多く含む河川堆積物で、2層に細分できる(IVa・IVb層)。IVa層は黒褐色を呈する細礫混じりシルト層で、土壌化が顕著にみられる。IVa層には縄文土器などがわずかに混入する。

V層は黄褐色シルト層で、調査区全域に広がる。検出された自然流路はいずれも本層上面を侵食し流下する。無遺物層である。

表2 主要遺構一覧

単位:cm (\*):復元値 [\*]:残存値 →\*\*:\*\*を切る,←\*\*:\*\*に切られる

種別	遺構名	平面形	長さ	幅	深さ	重複関係	掲載遺物	図	図版
自然流路	SR01	直線	[517.0]	[172.0]	117.0		1～4	4	3
	SR02	直線	[2539.0]	[412.0]	121.0	→SR04	5～10	5	4
	SR03	直線	[316.0]	378.0	60.0			5	4
	SR04	直線	[196.0]	[143.0]	36.0	←SR02	11～13	5	4

### 第3節 遺構と遺物の概要(図3)

調査区が氾濫原に立地するため、検出した遺構は自然流路のみで、竪穴住居跡や柱穴などの生活痕跡は確認できなかった。確認した自然流路は4条で、分岐・合流しつつ網目状に調査区全域に広がる。検出面はV層上面で、中世以前の段階に侵食・運搬・堆積が反復的に繰り返されたものと考えられる。これらの自然流路については、表2に一覧し各節で詳述する。

遺物は大部分が自然流路内埋積土からの出土で、大部分のものに摩滅痕が看取される。時期的には縄文時代から中世にかけてのものが認められるが、比率的には弥生時代の遺物が多い。出土総点数は256点で、そのうち14点の資料を図化した。内訳は縄文土器15点・弥生土器163点・石器3点・須恵器43点・土師器12点・瓦器2点・陶磁器2点・瓦1点・金属製品1点・その他14点である。掲載した遺物については表3に一覧し、掲載遺物を除くすべての遺物について、出土位置・種別・部位・器種・点数などの情報を表4に一覧した。

出土遺物についてはA～Cの3区分に分類後、愛媛県教育委員会へ移管し、愛媛県教育委員会が保管・管理している。なお、各区分の分類は以下の基準に拠った。

A...報告書掲載遺物

B...Aを除く遺物で、

- 1.遺構出土のものや出土層位の明確な土器類で、器種・部位が判別可能な個体。
- 2.木製品、土製品、金属製品、剥片・碎片を除いた石製品。

C...A・Bを除く遺物。

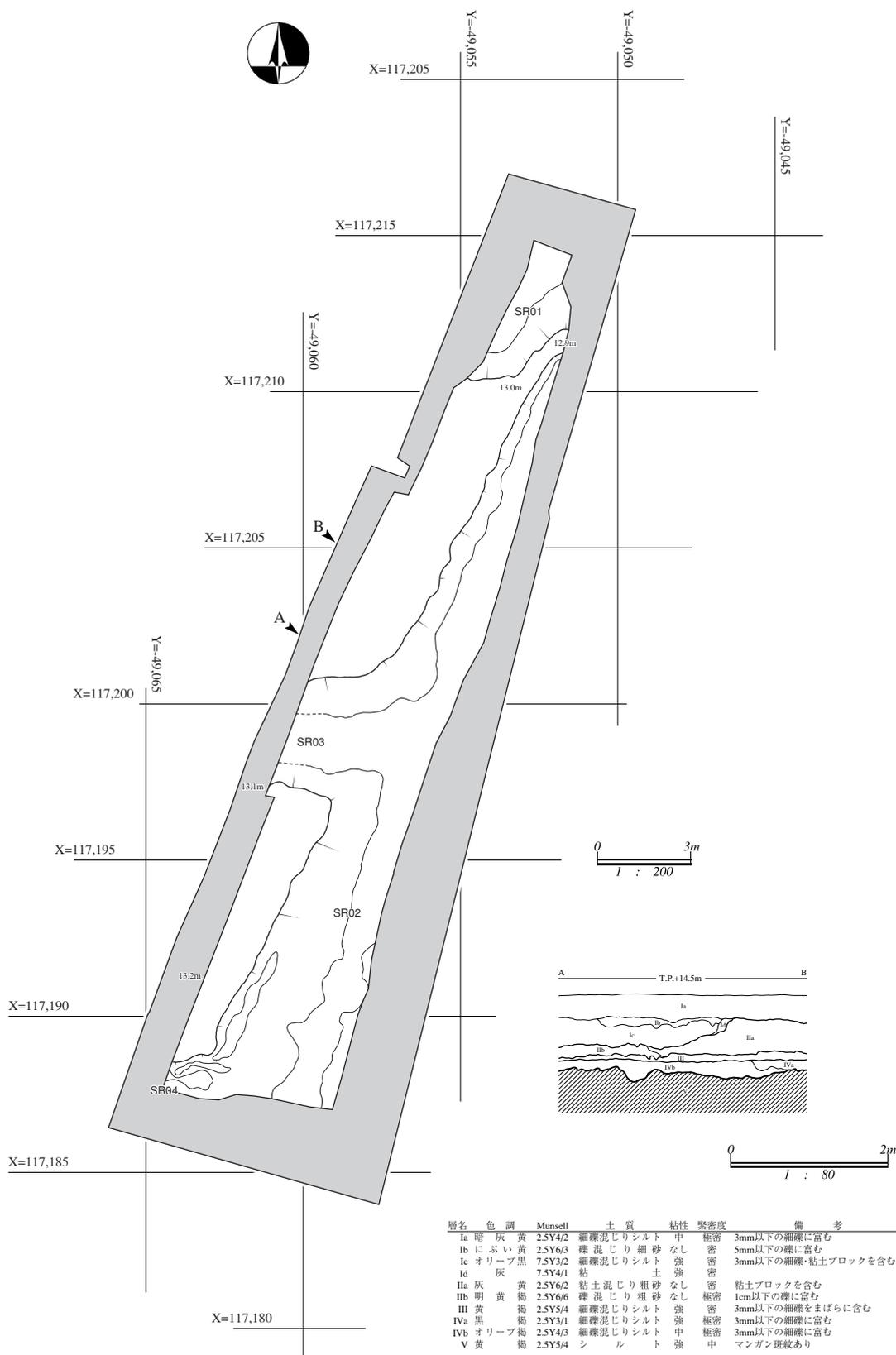


図3 検出遺構と基本層序



## 第4章 縄文時代～中世の遺構と遺物

V層上面において自然流路4条を検出した。V層上面の標高は12.9～13.2mで、南西から北東へわずかに傾斜する。自然流路は調査区全域に広がりを見せ、さらに調査区の全周囲へのびる。調査区周辺はかつて旧浅川の本流・支流が網目状に入り組み、洪水や氾濫によって侵食・運搬・堆積を繰り返す不安定な環境にあったものと考えられ、竪穴住居や柱穴などの人為的な生活痕跡は確認できなかった。

### 第1節 自然流路

#### 1 SR01(図4)

**遺構** 調査区の北端で検出した。V層を侵食し、南北へわずかに蛇行しつつ南西から北東方向へ流下する。検出したのは流路全体のごくわずかな部分で、検出長5.17m、検出幅1.72m、検出面からの深さは最大で1.17mを測る。流路東端および西端はさらに調査区外へのびる。その流下方向から、調査区外でSR02と斜交するものと推測される。

埋土は11層に細分できる。細粒堆積物と粗粒堆積物が互層に堆積し、最下層の小礫混じり細砂層(10層)には暗緑灰色粘土が塊状・ラミナ状に混入する。出土遺物は埋土中から縄文土器7点・弥生土器52点・須恵器2点・土師器1点が出土しており、このうちの4点を図示した。このうち古墳時代の須恵器は、流路最上層に堆積した有機質を多く含む黒色細礫混じりシルト層にみられ、より下位に堆積する粗粒堆積物(3～7層)に弥生土器の混入がみられた。流路の埋没時期は、堆積状況と出土遺物から古墳時代と考えられ、SR02に先行する。

**遺物** 1・2は弥生土器壺の底部である。底部はいずれも大きな平底で、胴部は外上方へ大きく開き、直線的あるいはやや内湾気味にのびる。1の内外面にはタテ方向のヘラミガキがていねいに施される。2は外面にハケ目を残し、内面には板ナデの痕跡が顕著に残る。

3は須恵器杯身である。口縁部は内傾しつつ直線的にのび、口縁端部にナデによる明瞭な段をもつ。底部外面には回転ヘラケズリが施される。

4は土師器杯である。口縁部は底部付近で緩やかに屈曲したのち直線的に外上方へのびる。口縁端部はわずかに尖る。

#### 2 SR02(図5)

**遺構** 調査区全域で検出した。V層を侵食し、南西から北東方向へほぼ直線的にのびる。検出長25.39m、検出幅4.12m、検出面からの深さは最大で1.21mを測る。流路北端および南端、流路右岸側はさらに調査区外へのびる。調査区中央部でSR03、南端でSR04と合流する。SR04を切る。SR03との先後関係は不明であるが、埋土の状態から同一時期のものである可能性が高い。流下方向から北側でSR01に合流すると推測される。

埋土は25層に細分できる。細礫混じりシルト・細砂・粗砂の互層堆積である。流路中位に堆積

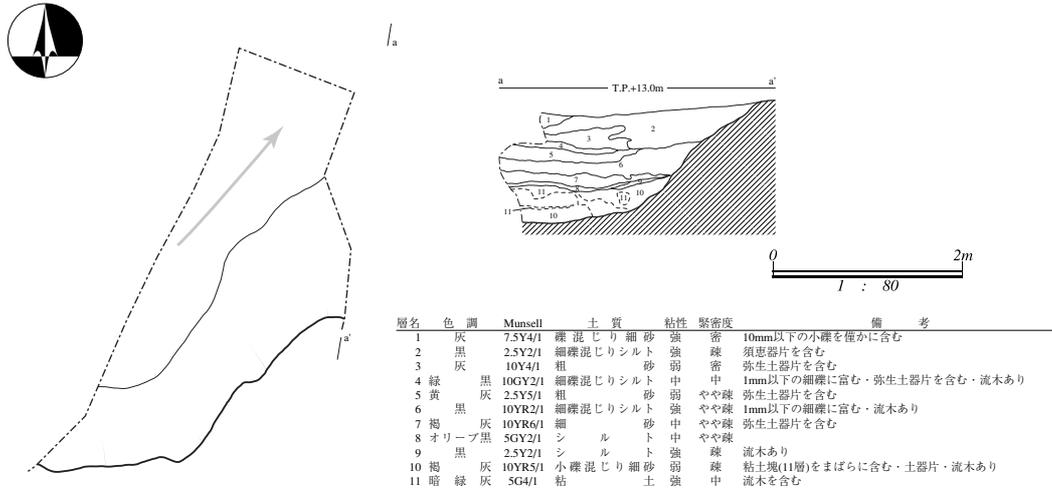


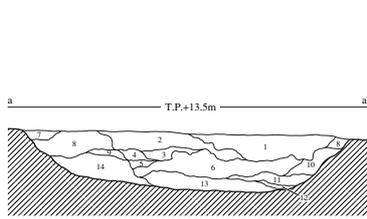
図4 SR01遺構と遺物

するグライ化したシルト層には、流木が多く含まれるが、人為的な加工痕が看取されるものは認められなかった。出土遺物は縄文土器6点・弥生土器69点・石器1点・須恵器38点・土師器7点・土師質土器1点・陶器1点・金属器1点で、このうちの5点を図示した。出土遺物の大半はSR02最初期の埋積土である(明黄)褐色粗砂から出土し、出土した遺物の大半には摩滅痕がみられた。流路の埋没時期は出土遺物と堆積状況から中世と考えられ、SR01・04を切る。

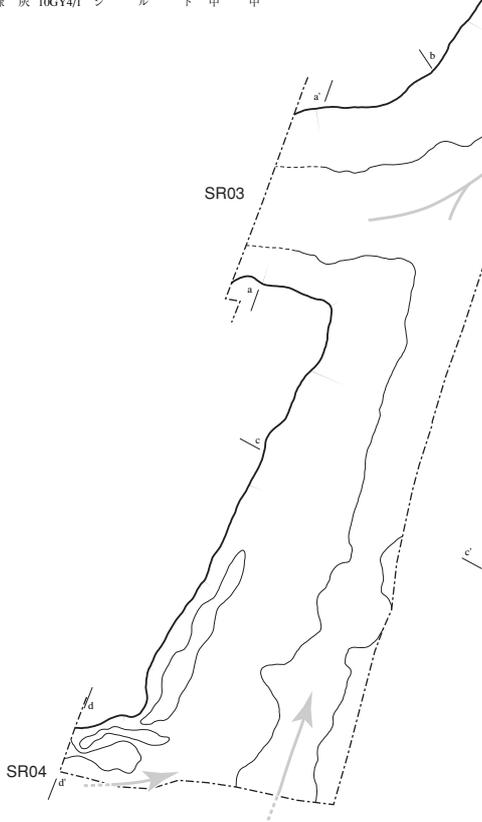
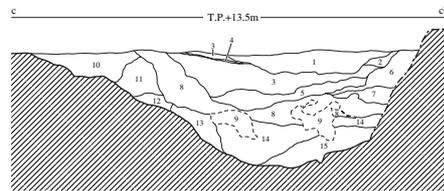
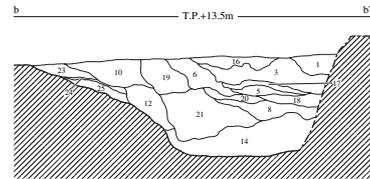
**遺物** 5は縄文土器鉢である。口縁部は外傾して開き、端部付近に3条の沈線が施される。胎土には多量の長石・石英粒が含まれる。摩滅が著しく調整などは不明である。

6はサヌカイト製のスクレイパーである。背面には求心状の剥離痕がみられる。上半部を折り取りによって整形したのち、背面側からの調整でエッジを作出する。

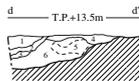
7は須恵器杯蓋である。口縁部は天井部から直線的にのび、端部付近でわずかに屈曲する。口縁端部は尖り気味におさめる。内外面ともに回転ナデを施す。



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	にぶい黄褐	10YR4/3	細礫混じり粗砂	なし	極密	3mm以下の細礫を僅かに含む
2	にぶい黄	2.5Y6/3	細礫混じり細砂	弱	密	マンガン沈着層
3	灰	2.5Y7/2	細礫混じり細砂	なし	密	5cm以下の小礫をまばらに含む
4	灰	2.5Y6/2	シルト	弱	極密	3mm以下の細礫に富む
5	灰	2.5Y6/2	細礫混じり粗砂	弱	密	3mm以下の細礫に富む
6	淡黄	2.5Y8/3	礫混じり粗砂	なし	中	粗砂をまばらに含む・流木あり
7	暗灰黄	2.5Y5/2	細礫混じりシルト	弱	極密	3mm以下の細礫に富む
8	暗灰黄	2.5Y5/2	細礫混じりシルト	中	極密	3mm以下の細礫をまばらに含む
9	暗灰黄	10YR4/2	細礫混じり粗砂	中	極密	3mm以下の細礫を僅かに含む
10	暗緑	10YR8/1	細礫混じり粗砂	中	極密	5mm以下の細礫を含む
11	暗緑	10GY4/1	シルト	弱	密	
12	暗灰黄	2.5Y8/1	細礫混じり粗砂	なし	中	3mm以下の細礫に富む
13	明褐	2.5Y6/6	礫混じり粗砂	中	中	1cm以下の小礫に富む
14	暗緑	10GY4/1	シルト	中	中	



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	にぶい黄	2.5Y6/4	細礫混じりシルト	弱	極密	黒褐色粘土ブロックを含む・須臾器片あり
2	淡黄	2.5Y7/3	礫混じり粗砂	なし	密	
3	淡黄	2.5Y8/3	礫混じり粗砂	なし	密	5mm以下の細礫に富む
4	灰	7.5Y7/1	細礫混じり粗砂	なし	密	
5	灰	10YR8/1	細礫混じり粗砂	なし	極密	5mm以下の細礫に富む
6	にぶい黄橙	10YR6/3	細礫混じりシルト	弱	密	3mm以下の細礫を僅かに含む
7	暗緑	10GY4/1	シルト	弱	密	流木あり
8	淡黄	2.5Y8/3	礫混じり粗砂	なし	密	5mm以下の細礫を含む
9	暗緑	10GY4/1	シルト	弱	密	
10	暗灰黄	2.5Y5/2	細礫混じりシルト	弱	極密	5mm以下の細礫を含む
11	暗緑	10GY4/1	シルト	中	中	
12	灰	2.5Y8/1	細礫混じり粗砂	なし	中	5mm以下の細礫を含む
13	オリーブ褐	2.5Y4/3	シルト	中	中	
14	明黄褐	2.5Y6/6	礫混じり粗砂	なし	中	1cm以下の小礫に富む・土器片あり
15	黒褐	10YR4/6	細礫混じり粗砂	なし	中	3mm以下の細礫に富む・土器片を含む
16	灰	5Y7/2	細礫混じりシルト	なし	極密	3mm以下の細礫を僅かに含む
17	黒褐	10YR2/3	粗砂	なし	密	マンガン沈着層
18	黄褐	10YR5/6	小礫混じり粗砂	なし	密	5cm以下の小礫をまばらに含む
19	黄	2.5Y5/3	細礫混じりシルト	弱	極密	3mm以下の細礫に富む
20	灰	2.5Y8/1	細礫混じり粗砂	なし	密	3mm以下の細礫に富む
21	灰オリーブ	5Y4/2	シルト	中	中	粗砂をまばらに含む・流木あり
23	灰	5Y4/1	細礫混じりシルト	なし	極密	3mm以下の細礫に富む
24	黒	10YR2/1	細礫混じり粘土	強	極密	3mm以下の細礫を僅かに含む
25	黄	2.5Y5/3	細礫混じり粗砂	なし	極密	



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	灰オリーブ	7.5Y4/2	礫混じり粗砂	なし	極密	1cm以下の小礫に富む
2	オリーブ黒	7.5Y3/2	細礫混じりシルト	中	極密	1mm以下の細礫を含む
3	黒	10YR2/1	シルト	中	極密	
4	黒褐	2.5Y3/1	細礫混じり粗砂	なし	極密	3mm以下の細礫に富む・土器片あり
5	灰オリーブ	7.5Y4/2	礫混じり粗砂	なし	極密	1cm以下の小礫に富む
6	暗緑	7.5GY4/1	細礫混じりシルト	中	極密	3mm以下の細礫に富む

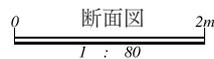
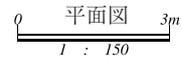


図5 SR02・03・04平断面

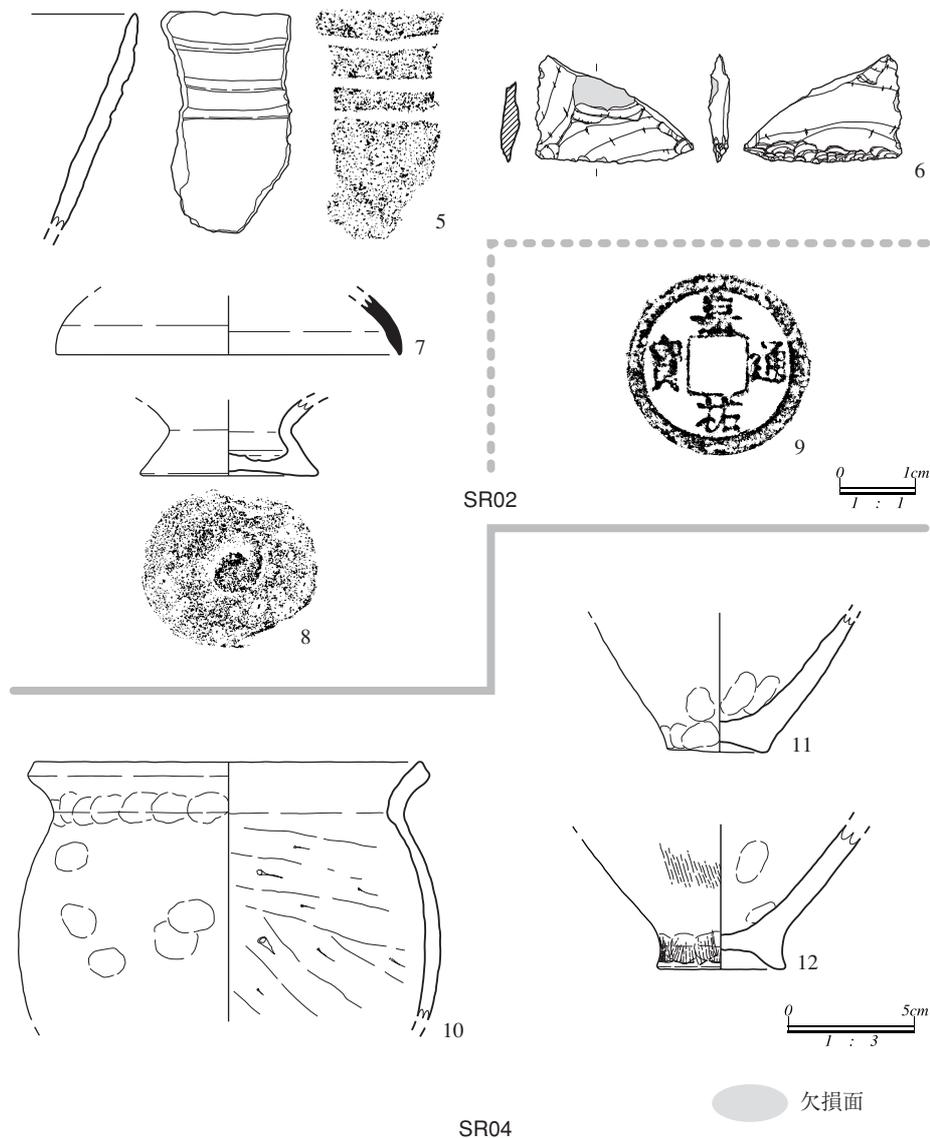


図6 SR02・04遺物

8は土師質土器杯である。底部は柱状高台で、口縁部側から底部を削り貫いたあと底部内面に回転ナデを施す。底部外面にはヘラ切りの痕跡が残る。

9は「嘉祐通寶」(北宋：初鑄1056年)である。

### 3 SR03(図5)

**遺構** 調査区中央部西壁際で検出した。V層を侵食し、直線的に北西から南東方向へ流下する。検出したのは流路全体のわずかな部分で、検出長3.16m、検出幅3.78m、検出面からの深さは最大で0.6mを測る。流路東端はSR02に合流する。SR02との先後関係は不明である。

埋土は14層に細分でき、細礫混じりシルト・細砂・粗砂の互層堆積である。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、流路内埋土の状態から、形成・埋没時期はSR02とほぼ同時

期と考えられる。

#### 4 SR04(図5)

**遺構** 調査区の南端で検出した。V層を侵食し、直線的に北西から南東方向へ流下する。検出したのは流路全体のごくわずかな部分で、検出長1.96m、検出幅1.43mである。検出面からの深さは最大で0.36mを測り、ほかの流路と比べ規模は著しく小さい。流路西端と流路右岸は調査区外へのび、流路東端はSR02に切られる。

埋土は6層に細分でき、細礫混じりシルト層・細砂層の互層堆積である。遺物は弥生土器40点が出土しており、このうちの3点を図示した。流路の埋没時期は出土遺物と堆積状況から弥生時代後期と考えられる。

**遺物** 10～12は弥生土器甕である。10は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は屈曲したあと外反しつつ短くのびる。屈曲部外面付近には指頭圧痕が、胴部内面にはヘラケズリの痕跡が残る。11・12は底部片である。底部はいずれも上げ底で、内外面には指頭圧痕が顕著にみられるほか、外面にハケ目を残すものがある。

## 第2節 遺物

流路に伴わない遺物として、III・IV層中から、縄文土器・弥生土器・石器・須恵器・土師器・瓦器・備前焼などが出土しており、このうちの特徴的なものを図示した。

### 1 縄文土器(図7)

13は鉢である。平底の底部をもち、胴部は外側へ大きく開く。摩滅が著しく調整などは不明である。



### 2 瓦器(図7)

14は椀である。口縁部は外上方へ大きく開き、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面にはヨコナデが施され、体部外面には成形時の指頭圧痕が顕著に残る。体部内面には疎らなヨコ方向のヘラミガキが施される。

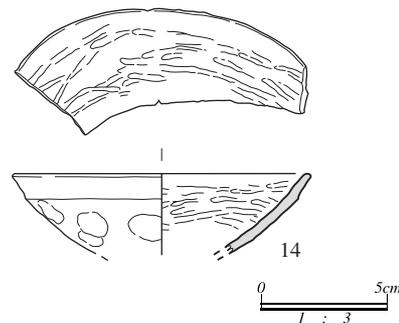


図7 遺構に伴わない遺物

表3 掲載遺物一覧

番号	種別	器種	出土情報	法量	外面色調 内面色調	調整	備考	図	図版
1	弥生	壺	SR01	LR4.2	2.5Y6/2 2.5Y6/2	o:ナデ,ミガキ指頭圧痕 i:ナデ,ミガキ指頭圧痕		4	5
2	弥生	壺	SR01	LR6.7	5Y5/2 2.5Y6/2	o:ナデ,ハケ i:板ナデ		4	5
3	須恵器	杯身	SR01	TR(11.0),MR(13.0),H4.9	N4/0 N5/0	o:回転ナデ,回転ヘラ i:回転ナデ		4	5
4	土師器	杯	SR01	TR(10.6)	5YR4/6 5YR4/6	o:回転ナデ i:回転ナデ		4	5
5	縄文	鉢	SR02		7.5YR5/4 7.5YR4/6	o:ナデ i:ナデ		6	5
6	石器	スクレイパー	SR02	L6.2,W4.3,T0.9,g21.41			サヌカイト	6	5
7	須恵器	杯蓋	SR02	TR(13.4)	N5/0 5B5/1	o:回転ナデ i:回転ナデ		6	5
8	土師質	杯	SR02	LR(6.8)	7.5YR7/4 7.5YR7/6	o:回転ナデ i:回転ナデ	ヘラ切り	6	5
9	金属器	古銭	SR02	R2.4			嘉祐通寶	6	5
10	弥生	甕	SR04	TR(15.2)	7.5YR7/4 10YR7/4	o:ナデ,指頭圧痕 i:ナデ,ヘラケズリ		6	5
11	弥生	甕	SR04	LR3.9	7.5YR5/4 10YR7/3	o:ナデ,指頭圧痕 i:ナデ,指頭圧痕		6	5
12	弥生	甕	SR04	LR(4.8)	2.5Y5/3 2.5Y6/3	o:ナデ,ハケ,指頭圧痕 i:ナデ,指頭圧痕		6	5
13	縄文	鉢	IV層	LR4.4	7.5YR5/6 2.5Y5/2	o:ナデ i:ナデ		7	5
14	瓦器	椀	III層	TR(11.6)	N4/0 N4/0	o:回転ナデ,指頭圧痕 i:回転ナデ,ヘラミガキ		7	5

表4 出土遺物一覽

時期	出土情報	種別	部位	器種	区分	点数	掲載番号	
縄文	SR01	縄文土器	口縁部	鉢	B	1		
			胴部		C	6		
	SR02	縄文土器	口縁部	鉢	A	1	5	
			胴部		C	5		
IV層	縄文土器	底部	鉢	A	1	13		
弥生	SR01	弥生土器	口縁部	壺	B	1		
			頸部		壺・甕	B	6	
	SR02	弥生土器	底部	壺	A	2	1,2	
			胴部		壺・甕	C	43	
			口縁部		壺	B	2	
			支脚		B	1		
			頸部		壺・甕	B	3	
			底部		甕	B	1	
	SR04	弥生土器	胴部	壺・甕	C	62		
			石器	削器	A	1	6	
			口縁部	甕	A	1	10	
			胴部	甕	B	1		
	III層	弥生土器	頸部	壺・甕	B	2		
			底部	甕	A	2	11,12	
			胴部	壺・甕	C	31		
			杯部	高杯	C	1		
	攪乱	弥生土器	胴部	壺・甕	C	1		
			石器	伐採斧	B	1		
	古墳 / 古代	SR01	須恵器	半完形	杯身	A	1	3
				頸部	壺	B	1	
SR02		須恵器	口縁部	杯	A	1	4	
			杯蓋	A	1	7		
				B	2			
				B	4			
				C	5			
			天井部	杯	B	5		
			底部	皿	B	1		
			体部	杯	C	2		
			胴部	壺	C	2		
			甕	C	12			
脚部		高杯	B	1				
杯部		高杯	C	2				
土師器		口縁部	杯	B	1			
		底部	杯	B	4			
	体部	杯	C	1				
	脚部	高杯	C	1				
III層	須恵器	胴部	高杯	C	2			
		杯部	高杯	C	1			
中世	SR02	須恵器	口縁部	捏鉢	B	1		
			土師器	杯	A	1	8	
		陶器	龜山焼甕	口縁部	B	1		
	III層	瓦器	古銭	A	1	9		
			口縁部	A	1	14		
時期 不明	SR02	瓦質土器	体部	備前焼挿鉢	C	1		
			陶器	胴部	剥片	C	1	
	III層	土師器	瓦	平瓦	B	1		
			底部	杯	B	1		
			体部	杯	C	2		
V層		胴部	杯	C	14			



## 第5章 まとめ

調査区周辺は谷底平野のほぼ中央部にあたり、継続的に侵食・運搬・堆積が繰り返される環境にあったため、検出されたのは自然流路4条のみで、人為的な生活痕跡は確認できなかった。自然流路内から出土した遺物には、弥生時代を中心として縄文時代から中世までのものがみられ、過去に浅川流域で調査された諸遺跡での堆積環境・遺構の構成・出土遺物の時期や様相とおおむね符合する成果が得られた。今回検出された自然流路は、弥生時代から中世にかけて形成されたものである。なかでもSR01・02は流路の規模から旧浅川の本流と考えられるもので、調査区北端で確認したSR01は埋土の状態や出土遺物から、矢田八反坪遺跡SR18と同一の河道である可能性が高く、古墳時代以前に形成された浅川旧河道の一部を構成する。

矢田地区周辺の浅川流域では縄文時代後期から晩期の遺物が普遍的にみられ、本遺跡でも福田KII式と考えられる磨消縄文・沈線文系土器がわずかに出土した。このほか、矢田八反坪・大出口遺跡では中津・福田KII式に加えて縁帯文様式の土器が、矢田八反坪遺跡・矢田八反坪遺跡3次では突帯文土器が出土するなど、浅川を下流へくだるほど時期的には新しいものが出土する。この段階の遺構はこれまでのところ確認されておらず、出土遺物はほとんどが自然流路からの出土である。

弥生時代になると周辺地域で遺構の形成が進み、旧浅川の両岸では過去の調査において多くの遺構が検出されている。矢田八反坪遺跡周辺では、弥生時代中期前半に浅川旧河道の両岸に広がる微高地で遺構が密となることから、近接地に集落が存在すると考えられる。また、矢田八反坪遺跡3次の縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての堆積層(IXb層)からは、植物珪酸体分析の結果、多量のイネが検出されており、埋積が進んだ旧河道の凹地に形成された後背湿地を中心として、稲作がおこなわれていた可能性がある。矢田八反坪遺跡周辺では、遺跡の経営は中期前半で一端途絶え、弥生時代後期から古墳時代初頭頃に土器の出土量が再び増加する。弥生時代後期から古墳時代初頭頃の遺物は、上流側の矢田大出口遺跡周辺でも確認されており、弥生時代後期以降、周辺の微高地にはより面的に集落が展開した可能性が高い。

周辺の古墳時代集落は現状では不明である。ただ、浅川旧河道の埋積土からは、TK47・TK217型式頃の遺物が散発的にみられ、この時期の集落や墳墓が周辺に存在する可能性はある。この段階以降河道は徐々に西側へ移動し、矢田大出口遺跡2次SR02や矢田八反坪遺跡3次SR02の流下方向から、中世には河道が現在の浅川付近にほぼ固定されたものと考えられる。河道の移動にともなって、それ以前に形成された河道はほぼ埋没し、周囲に発達した後背湿地において、この段階以降、ソバ等を栽培する畑作や水田耕作が安定的に営まれたことが周辺遺跡における自然科学的分析の結果より明らかとなっている。

調査成果が蓄積され、比較的様相の明確な矢田八反坪遺跡周辺に対し、本遺跡の所在する矢田大出口遺跡以南の浅川上流域については、いまだ調査例に乏しく、その様相には不明瞭な部分が少なくない。ただ、地形的にみても調査区は谷底平野の氾濫原に立地するため、集落が存在する可能性はきわめて低く、各時期の集落は本遺跡北側に位置する帯状の微高地に存在する可能性が

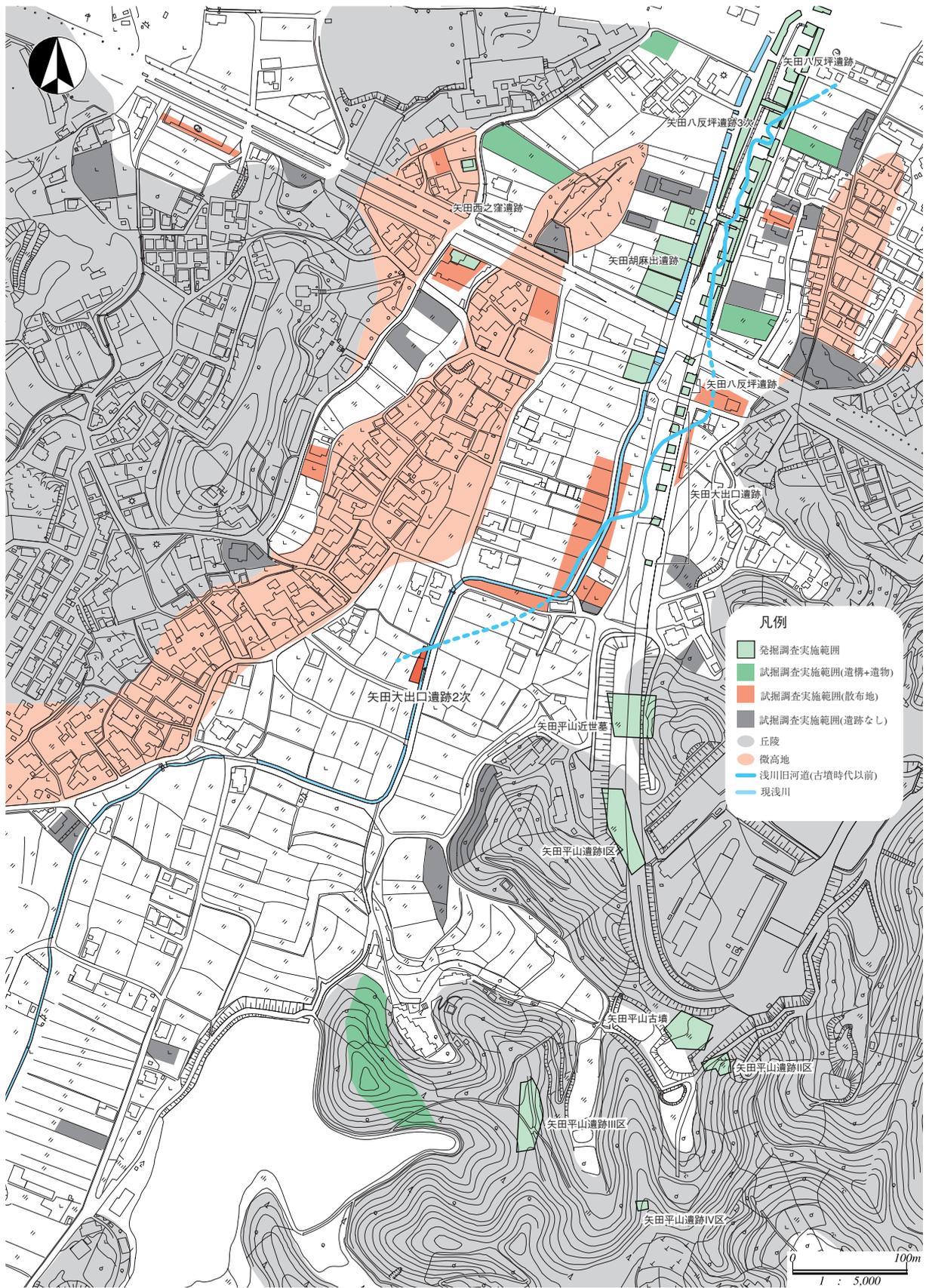


図8 浅川旧河道と周辺の遺跡立地

高い。

#### 参考文献

- 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「6.瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 柴田昌兎 2000 「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年四国編』木耳社
- 高橋学 2003 『平野の環境考古学』古今書院 pp132～147
- 眞鍋昭文・今泉ゆかり 2000 『阿方遺跡・矢田八反坪遺跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 小黒裕二ほか 2000 『一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 西川真美 2004 『矢田八反坪遺跡3次』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 今治市教育委員会 1998 『矢田西之窪遺跡・高市徳森遺跡』
- 今治市教育委員会 1999 『馬越和多地遺跡・矢田西之窪遺跡II』
- 今治市教育委員会 1996 『市内遺跡試掘確認調査報告書II』
- 今治市教育委員会 1997 『市内遺跡試掘確認調査報告書IV』
- 今治市教育委員会 1998 『市内遺跡試掘確認調査報告書VI』
- 今治市教育委員会 1999 『市内遺跡試掘確認調査報告書VIII・IX』
- 今治市教育委員会 2000 『市内遺跡試掘確認調査報告書X』
- 今治市教育委員会 2001 『市内遺跡試掘確認調査報告書XII』
- 今治市教育委員会 2002 『市内遺跡試掘確認調査報告書XIV』
- 今治市教育委員会 2003 『市内遺跡試掘確認調査報告書XV・XVI』
- 今治市教育委員会 2004 『市内遺跡試掘確認調査報告書XVII』
- 今治市教育委員会 2005 『市内遺跡試掘確認調査報告書XIX・XX』
- 今治市教育委員会 2006 『市内遺跡試掘確認調査報告書XXI・XXII』



四 版

## 凡 例

1. 遺物写真の縮率は、特に指定のないものについては約1/3である。
2. 遺構写真・遺物写真とも池尻が撮影した。



遺跡遠景(大谷墓地より)



調査前(南より)



遺構完掘状況(南より)



西壁基本層序(東より)



SR01(西より)



SR01セクション(北西より)



SR02(北東より)



SR02セクション(南より)



SR03(西より)



SR03セクション(東より)



SR04(南西より)



SR04セクション(東より)





ふりがな	やたおおでぐちいせきにじ		
書名	矢田大出口遺跡2次		
副書名	浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ		
巻次			
シリーズ名	埋蔵文化財発掘調査報告書		
シリーズ番号	第141集		
編著者名	池尻伸吾 福山裕章		
編集機関	財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター		
所在地	〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68-1 TEL (089) 911-0502		
発行年月日	西暦 2007年 7月		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やたおおでぐちいせき 矢田大出口遺跡	えひめけんいまばりしやた 愛媛県今治市矢田 こう 甲611,612	38202		34°03'19"	132°58'05"	20070405 ┆ 20070523	100	浅川中小河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田大出口遺跡	散布地	弥生時代 古墳時代	自然流路	縄文土器,弥生土器,石器, 須恵器,土師器,瓦器,陶 器,古銭	

要約	開析谷中央部に位置する散布地である。人為的な遺構は確認できなかったが、網状に広がる自然流路を確認した。自然流路からは弥生土器を中心として、縄文時代～中世にかけての多様な遺物が出土しており、遺跡周辺の古環境やその変遷を検討するうえで貴重な資料である。
----	--



埋蔵文化財発掘調査報告書 第141集

矢田大出口遺跡2次  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成19年7月

編集・発行 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター  
愛媛県松山市衣山四丁目68-1  
TEL (089) 911-0502

印刷 岡田印刷株式会社









